

中 学 校

あの日から五年の時が流れて

角田市立角田中学校

三年 瀬戸 ひかり

ゴゴゴ……と大きな地鳴りが響いた。次の瞬間、机が倒れ、黒板が落ちるくらい激しい揺れを感じた。このままおさまらないのではないかと思わせる長い揺れに、不安がつのつていく。そして、絶え間なく続く余震。想像もつかない何かが起きていく気がした。

あれから五年。私は中学三年生になりました。宮城県を含め被災地は、全てが元通りというわけにはいきませんが、たくさんの方の支援を受け、復興してきています。

昨年、授業の一環として宮城県山元町の仮設住宅を訪問しました。一軒一軒回って話を聞き、私は自分が体験しなかった津波やその後のこと、仮設住宅での暮らしについて初めて知りました。衝撃的だったし、どういう言葉で聞けばいいのか迷う話もありました。でも、住んでいた家や大切な家族を亡くされた方が涙をこらえながらも当時の話をしてくださり、辛いことがあっても力強く生きていく姿に、逆に元気をもらいました。そして、この震災は次の世代へ語り伝えていくべきだと強く思いました。東日本大震災では、約一万六千人の人が亡くなり、二千五百人を超える行方不明者の捜索が今も続けられています。今後震災によつて、命を落とす人、悲しむ人を少しでも減らすためにも、私たちが架け橋となり、語り継いでいく必要があると思います。

最近も、度々地震が起きています。私の家では東日本大震災以後、防災グッズがぐんと増えました。また非常用の水や食料、ライトなどを家族全員が分かる場所に置いておくようになりました。そして、地震が起きたときの対応を家族で話し合う時間も多くなりました。その時間はあの震災が起きて失われたものだけでなく、学ぶこともたくさんあったのだと再確認できる時間でもあります。こうして地震が起きている今だからこそ、五年前の当時学んだ、備えることや他人と助け合い協力することの大切さなどを思い出すことが、必要なのではないかと感じています。

防災への意識が高まり、街の復興が進められても、うまく進まないものもあります。それは「心の復興」です。私は、時間はどんどん進むのに、心が、気持ち、うまく進めずにとり残されたような感覚になることがあります。五年も経っているのに、あつという間で、震災はつい先日の出来事だったような不思議な感覚です。だから今も小さな地震でも怖いと思う自分がいるのです。そんなときに思うのは、山元町のように、津波を経験した人たちの心の傷の深さです。それは私には計り知れないものです。地震が起るたびに、あの日の思いがよみがえってくるにちがいません。私もそうですが、忘れようとするのではなく、ゆっくりと長い時間をかけて自分の心と向かい合い、前へ進む力をつけていくしかありません。それが心の復興につながるのだと思います。

今、あの日を思い出して一番思うことは、こうして物を書いたり、読んだり、話したり、歌ったり、食べたり、笑ったり、当たり前のことを当たり前にできていることに感謝して生きていこうという

ことです。あの震災で失ったものはたくさんあります。でも、得たものも同じくらいあったと考えられるようになりました。物を大切に扱うようになったこと。人の立場に立って考えられるようになったこと。家族を大切に思うこと。当たり前前にありがたうを言えるようになったこと。など……

震災を経験したことで、私は自分自身の成長を感じます。以前、母から聞いた「明日が来ない今日もある」という言葉の意味を理解し、「今」を大切に、感謝して生きようと思うようになりました。あの日、命を落としてしまった人やその家族。どんな気持ちだったのだろうかと考えると胸が痛みます。しかし、私はいつまでもよくよとして生きていくのは命の無駄遣いだということも震災から学びました。今ここにある「命」に感謝して力いっぱい上を向いて生きることが震災で命を落とされた方々のためにも、大切なことだと思います。二〇一一年三月十一日。小学校四年生で経験した東日本大震災。あんなに怖かったことはなかったけれど、この五年の間に日本人の強さと温かさを感じました。私も成長し、様々なことを学びました。失ったものだけでなく、得たものもあつたと考えられるようになりました。こんなふうにだんだん気持ちの整理をしていければいいのです。私は一人だけで生きていくわけではありません。あの震災を経験した人たちと共に支えあつて、この五年を生きてきました。震災で命を落とされた方の分まで生きて、真の復興を見届けたいと思います。

僕たちの使命

蔵王町立円田中学校

二年 木村 一希

僕は今でもあのときのことをはっきりと覚えて
います。小学校三年生だった僕は、小学校の校門
のところで地震に遭いました。地面から恐ろしい
ほどの地鳴りが鳴り響き、木々は音を立てながら
揺れ、周辺の家からは瓦が崩れ落ち、その揺れは
何時間にも感じられました。地震が起きてから約
三時間後、家で母と会い、母は泣きながら、
「良かった。本当に良かった。」
と何度も言っていました。海岸部にいた父とはそ
の日に会えませんでした。父の安全が確認され
とてもほっとしました。

沿岸部では、多くの人が大津波に遭い、家を失
いました。当時の教頭先生、横江先生もその一人
でした。先生は地震が起きた日は、自宅に帰れず、
家族と連絡も取れず、胸がはち切れそうになりな
がら、小学校で一晩を過ごしました。

そして、震災の二年後から三年続けて、横江先
生の実家がある石巻市雄勝町に、クラスの友人や
その家族と復興のお手伝いをしに行くことになり
ました。

五年生の時は、大津波で被災した船越小学校で、
地元の漁師の方々に結成された「船越オドゴスタ
ーズ」のリーダー、中里さんから話を聞きました。
その中でも印象に残っているのが「このままでは
死ねない。この浜を復興させ、若い世代に引き継
ぐまでは。」という言葉です。

六年生の時は、桑浜小学校で、校舎再生プロジ
ェクト担当、岩村さんから話を聞きました。岩村
さんは、

「この場所を早く復興させ、いろいろな人に泊ま
りに来てもらい、周辺の復興がどれだけ進んでい
るのか、周辺の人が今どのような気持ちで生活し
ているのかを知ってもらいたい。そのために今頑
張っているんだ。」

と、話してくれました。岩村さんは、当時二十三
歳でしたが、とてもしっかりしていると感じまし
た。僕は将来、岩村さんのように人のために考え、
行動し、しっかりと自分の信念を貫いていけ
る大人になりたいと思いました。

旧桑浜小学校は、二〇一五年七月「モリウミア
ス」になり、子供の宿泊学習施設として再生し、
オープンしたそうです。岩村さんの夢がまた一步
進みました。

中学校一年生の時には、横江先生の家族にお世
話になりながら、スレート磨きやホタテの処理作
業の手伝いをしました。防波堤が新しくなってい
たり、復興商店街ができていたり、手伝い始めた
二年前に比べ、町並みが変わっていました。僕は
心の中で喜んでいました。でも、その時、横江先
生が、

「復興が進んでいるように見える？でもね、まだ
全然終わっていないんだよ。」

と言いました。僕は、こんなに自然や建物が戻っ
ているのにも思い、その言葉の意味がそのときに
は分かりませんでした。

でも、最近、その横江先生の言葉が分かった気
がします。先日テレビで震災の特集を観ていまし
た。そこで、

「現在、被災した地域は少しずつ震災前に戻りつ
つあります。でも被災した人々の心の傷は未だに
癒えていません。」

と言っていました。「心の傷は未だに癒えていな
い。」このことを横江先生は言いたかったのでは
ないかと思いました。

震災から五年が経とうとしています。また、震
災前の生活に戻ることができていない人がいます。
大切な人を失った人がいます。心に深い傷を負っ
た人がいます。今の日本、そしてこれからの日本
を支えていくはずだった人の大切な命が失われま
した。

僕たちは、この人たちの分までしっかりと生き
ていかなければなりません。「この人たちの分ま
で生きる」とは、どのようなことを意味するのか。
それは、雄勝や閑上などの被災地へ通い続け、
その土地の人と話し、復興の手伝いをし、その被
災地の変化を記録し続けること。被災地で見えてき
たことを、身近な人々（友人や親や地域の人、そ
して将来親になったときには自分の子供）に語り
続けること。そして、何よりも自分自身が「記憶
の半減期」に抗い、被災地に思いを寄せ続け、何
が自分にできるのかを問い続け、実行に移せる人
間になること。それが、東日本大震災を共に体験
した僕たちの使命だと思っています。

震災から五年目を迎えて

七ヶ宿町立七ヶ宿中学校

一年 秋葉 珠莉

蔵王のふもとにあるこの七ヶ宿は、ダムがあり、自然豊かな所です。ここでは、春には新緑、秋には紅葉など四季折々の季節を楽しむことができます。

さらに、冬には雪が多く屋根に沢山積もった雪は屋根から音を立てて落ちてきます。

ちょうど、あの五年前の三月十一日、あの日も雪がちらつく寒い日でした。当時小学2年生だった私は、スクールバスで帰るため、バスの時間まで学校の体育館で遊んでいました。すると、「ゴロロロロロ・・・。」といきなり大きな地震がきました。最初は、体育館の屋根から雪が落ち、その振動だろうと思っていました。でも、その揺れはおさまるところかますます大きくなっていきましました。怖くて怖くて私はどうすることもできずにいました。(ああ、どうしよう。)すると職員室の先生方から呼ばれる声が出て、私は急いで職員室に行き、大きな机の下に潜り、無事助かりました。しかし、その後も余震は続き、怖くて周りで泣き出す人もいる中で、私も、泣いてしまいました。(このまま帰れなかったらどうしよう。)

私が通っていた学校はすぐ後ろに急な山がそびえ立っています。自然災害によって、いつ崩れてもおかしくないという状態でした。いつも何気なく見ている風景なはずなのに、こんなに恐いと思つたことはありませんでした。毎日、スクールバ

スから見える緑のきれいな山々、清らかな川。この日は、生まれて初めて、「自然は怖いもの。」だと実感しました。

その後、少し余震も収まってきてとまっていたスクールバスも再スタートしました。無事家に着き、家族と再会してほっとしました。父がいて母がいて学校に通って、と当たり前前のがどれだけ幸せなのかを感じる事ができました。

最初は、家族が無事なだけで十分と思っていたけれど、停電になり、電気がつかない中での一週間、とても不便で大変なものでした。それだけ私たちの生活は便利になり、その便利さが当たり前になっていたのだと思えました。ようやく電気がついた時は感激でした。こんなに電気がありがたいと感じたことは今までありませんでした。

しかし、その後私が感じたものと比べものにならないくらい辛い出来事があったことを初めて目の当たりにした体験がありました。それは、小学校の遠足で閑上に行った時のことです。震災後初めて、そこへ訪れた時は、以前の町並みはすっかり変わり果ててしまい、あまりの違いに驚いてしまいました。その時先生から、こんなことを言われました。

「ここはね、津波がきて何千人という人が命を落としたんだよ。」

正直、幼かった私は、その話を実感できずにいました。でも、今その時の話を思い出すと非常に恐ろしく、胸が張り裂けそうな気持ちになります。その後も、毎年、閑上を訪れました。段々と、新しい道路や建物ができていました。でも、今までそこに住んでいた人々が築き上げてきたものや思いがそこにはあるはずで、それを思うと、こ

こで亡くなった方々やその家族の方々の気持ちは、はかりしれないものがあります。そして、ご遺族が元通りの生活ができるようになるまでには、相当な時間を要するのだらうと思えました。当たり前、とても大事で大切なことなんだ！としみじみ感じた体験でした。

二〇一五年四月、お釜周辺が震源と推定される火山性地震が増加し、火山活動が活発になりました。やっと元通りの生活に戻ったと思つたら今度は、火山性地震という恐怖。もしかしたら、蔵王が噴火するかもしれないということで蔵王に近い七ヶ宿に住んでいる私たちは、学校生活において、少しの期間外での活動を制限されました。しかし、その後火山活動も小康状態となり落ち着いたため、現在は活動の制限もなくほっとしているところです。ですが、いつまた危険な状況にさらされるかわかりません。自然の威力は強大です。常に、緊急の時を考えて、日々備えておかなければいけないと思います。

そして、命というものの尊さを感じながらこれからも生きていきたいです。

大切なこと

大河原町立金ヶ瀬中学校

三年 古山 舞衣

「命を大切にしてください。」

何度も聞いたことがあるこの言葉が、あの時は急に現実味を帯びて、私の胸に強く迫ってきました。

今年の七月三日、中学校の防災教育の一環として、全校生徒で名取市閑上を訪れた時のことです。

私たちは、初めに閑上中学校を見学しました。テレビでは何度も見ていましたが、実際に目の前に立ち、校舎の壁の時計が二時四十六分を指したまま止まっているのを見ると、胸が締め付けられる思いでした。

校舎はとても静かでしたが、語りかけてくるような感じを受けました。震災前はこの廊下や教室は話し声や笑い声で満ちていたんだろうと想像し、本当にここまで津波が来たんだ、どんなにか恐ろしかったことだろうと考えると、涙が出そうになりました。

案内して下さった語り部の方は、当時中二の息子さんが通っていた教室の中で、震災から今までの話などを、ひと言ひと言かみしめるように話してくださいました。その話は、辛い思い出の話ではなく、これから自分たちはどう生きるかという、前向きなメッセージです。そして最後に言うてくださったのが、

「皆さん、命を大切にしてください。」
という言葉でした。

お話を聞いて、私は自分が日常生活を当たり前に過ごせていることが、実はとても幸せなことなのだと気付きました。そして感謝の気持ちで湧いてくるのを感じ、自分の悩みがとてもちっぽけなものに思えてきたのです。

私はこれをきつかけに「命を大切にしよう」ということをもう一度考えてみました。

そしてそれは、自分自身を大切に、夢や目標をもって一生懸命努力することなのではないかと思いました。また、周りの人々を大切に、思いやりをもって接することなのではないかと考えました。

震災の教訓は本当にたくさんありますが、私が学んだ一番の教訓はこのことです。これからの生活の中で、私は常に「命を大切にしているか」と自分に問いかけたいと思います。

もう一つ、閑上見学から考えさせられたことがあります。それは「知っている」ことの大切さです。

閑上メイプル館で聞いたお話の中に、避難所のことがありました。震災当時、避難所で生活した人たちが沢山いて、トラブルが起こったり、ストレスから体調を崩す人も多かったそうです。そこで避難所の設営の仕方を考えてみようというものだったのですが、私たちはすぐそれを考えることができませんでした。それは、学校で避難所設営を考えるグループワークを体験していたからです。

金ヶ瀬中学校は、震災前から防災教育に力を入れており、設定を変えて年に四、五回行われる避難訓練を初めとして、今まで、地域の方と一緒に避難所の受付や救護、炊き出し作りなどを体験する「地域防災訓練」や、自分の住む地域を回って、災害時の避難場所や危険箇所の写真を撮り、みんな

なでマップを作るなどの活動等をしてきました。私はこのことによって、災害時に自分ができるべき行動がわかり、また自分にできることも増えていると感じています。「知っていること」が自分や周りの人を守るということをみんなが意識し、積極的に学ぶことが大切だと改めて思う体験でした。

震災から四年半が経ち、たくさんの人々の大きな力で復興は着実に進んでいると思います。しかし月日の流れの中で、あの時の気持ちが薄れつつあることも事実です。閑上へ行って私は、「自分ができることをやりたい。」という気持ちが高まりました。友だちも、そう言っていました。そこで生徒会の企画で、「閑上への募金活動」を行いました。生徒だけではなく、保護者や地域の皆さんも協力してください。思った以上に集まっても嬉しかったです。でも一番よかったことは、募金額ではなく、皆さんが「自分にできること」をもう一度考えるよいきっかけになったのではないかと思います。

中学生の私たちにできることは限られています。でも大切なことは「心の持ち方」なのではないでしょうか。私たちのよりよい未来を切り開きたいという思いこそが、復興の原動力になっていくのだと私は思っています。

未来へつなぐ

柴田町立船迫中学校

三年 櫻井 那菜

津波。改めてその怖さを知ることになった東日本大震災という出来事。足元に転がるがれき、所々抜けている壁や天井。そして、多くの人々の命が儚く散っていった。すごく心が痛んだ。私達も今回の震災を体験したものの、幸い被害は大きくならずにはすんだ。だからだろうか。実際にその光景を目の当りにすることがなく、何となく他人事のように思っていた。震災後、家の中でラジオを聞いていた。沢山の悲報が飛び交う中、私は大変だったんだな、私の身の回りじゃなくて良かったなと聞き流すだけだった。「3V絆プロジェクト」に参加するまでは。「3V絆プロジェクト」とは、私が通う船迫中学校が行っているボランティアのこと。毎年二年生が被災地へと出向き、震災後の建て物へ足を踏み入れ被災した方々の話を聞く。そして、仮設住宅の窓ふきや掃除をし、私達が大切に育てたラベンダーを届けるといったものだ。「もうだめだと思った。」

そんなことを思っていたとき、「津波のせいで、自分の大切な家族と友人を失ってしまったんだ。」とある方が言っていた。自分でも頭の中では分かっていた。でも、いざそれを言葉にされると現実を受け入れられなかった。目の前に広がる景色と被災された方々の言葉が嘘であって欲しい、夢であって欲しいと私は何度も思った。自分の身にもいつ起こってもよい出来事だとは、信じられなかった。ただ呆然と立ち尽くすことしか、私には出来なかった。

その後、私達は仮設住宅を訪れた。窓ふきや掃除をしながら、不思議に思ったことがある。それは皆さんが笑顔で生活をしていたこと。私は、きつと皆さんは落ち込んでいるに違いない。私が頑張って元気づけてあげようと意気込んでいた。私だったら毎日泣いて、これからの生活が不安になって過ごしていると思っていた。だから、皆さんもきつとそうなのだろうと。しかし、皆さんは今の状況を受け止め、前に向かって進んでいた。すごく輝いているように見えた。

楽しい時間はあっという間に過ぎたり、いつのまにか帰る時間となっていた。そんなときあるおばさんが、

「みんな来てくれてありがとう。毎年みんなと話すことを楽しみに待ってるんだ。みんなの笑顔を見ていると、こっちまで笑顔になれるよ。」と話してくれた。そう言われたとき、私でも力になれることがあったんだ、そう思えた。私は皆さんの笑顔で。皆さんは私達の笑顔で。そうやってみんな楽しく過ごすことが出来た。私が少しでも力になれたんだと思うと、すごく嬉しかった。こ

のような体験が出来ていなかったら、当たり前前の出来事だと受け止め幸せなことだと気付かなかっただろう。

家族と毎年行っていた海水浴。みんな泳いで、浮き輪でゆったり過ごしたり。とても楽しい思い出だった。しかし、今回時には牙を剥き私達をおそうものだとも忘れてはならないと思った。人の楽しい思い出を作るものでもあり、苦しみや悲しみを生み出すものでもある。これが自然なのだろうと思う。それを東日本大震災から学んだ。時代と共に流され、風化されることなく私達が後世へと伝えていかなくてはならない。自分の子や孫や、地域の方々。そして、全国や世界に向けて。何十年も何百年も先の未来へと伝えたい。限りのない歴史の中に東日本大震災という出来事を刻み込む。それが、現代を生きる私達の使命であると思うのだ。

励まし合って生きていく

川崎町立川崎中学校

二年 鈴木 舞海

午後二時四十六分。今までの平穏な日々がこの世のものとは思えない激しい揺れと共に崩れ去った瞬間でした。

当時小学三年生の私はいつものように学校へ行き、いつものように授業を受けていました、突然、激しい揺れが襲い、あちこちから悲鳴が聞こえ、不安と恐怖で泣き出す人が沢山いました。今、思い出してもあの時間は生きた心地がしない、地獄のような時間でした。

ようやく長い揺れが収まり、生徒全員で校庭に避難しましたが、全く情報が入ってこないのも分からないままでした。先生方に励まされ、友達同士でも励まし合いながら不安の中、家族の迎えを待っていました。その時、迎えに来てくれた祖母の姿を見て、ほっと安堵の吐息をもらしたと共に止め処無く涙が溢れてきました。

帰り道、崩れた瓦やひび割れた道路など、変わり果てた町の様子を見て、大きな衝撃を受けました。町が元通りになるまでどのくらいの時間がかかるのだろうか、家族全員無事なのだろうか、嬉しさの中で又もや別の不安が湧いて出ました。特に父は、その日岩手県海沿いの方面に働きに行っていたのです。津波で流されていないか、怪我をして一人で心細く助けを待っているのではないかと心配していると、無事に帰宅し母も無事だという事を聞きました。その時は、ほっとしたと同じ

時に言葉にならない嬉しさを感じました。

その夜は、余震が続く中近くの避難所で一夜を明かしました。外灯の明かりもない真つ暗な世界で、夜空には今まで見たこともない程綺麗な星が輝き、何もなかったかのように静かに浮かんでいました。その無数の星は、「悲しみや不安はすぐく大きいかもしれない、でも悲しんでいても失ったものは戻らない、だから悲しみをこらえて立ち上がり前進しなければならぬ」と、私達を見守り励ましていくかのように思いました。

翌日、ラジオのニュースの「壊滅的」という言葉に実感が湧きませんでした。しかし、数日後、テレビを通じて、その光景を見た時私は絶望感を感じたと同時に、この震災は、今後の歴史に残る大災害なのだという事を思い知ったのです。

東日本大震災は、多くのものを奪いました。多くの人が命を落とし、未だに故郷に帰れない人もいます。

ただ、失ったものもありましたが、得るものもあつたように感じます。その一つが、被災地へ手を差し伸べてくれる沢山の人が日本中、世界中にいる事です。顔も知らない被災者を、思いやりの心を持って助けてくれる人が沢山いる事は、とても嬉しい事だと思えます。多くのボランティアの方々に様々な支援をしてもらい、交流を持つたことで世界中の人との絆を感じることができました。また、この震災で私が、強く心に残っていることは、被災者同士の思いやりです。自分自身のことを優先するのが当然なのに、近所の方が声を掛けてくれたり、皆で食材を持ち寄って御飯を作ってくれたりしました。地域の交流が辛い時期を乗り越える力になり、人と人とのつながりの強さを

感じる事ができました。

今私たちは、震災前とほとんど変わらず学校に通い生活しています。日々あの日のことが忘れられ、すでに過去のことにされつつあると私は感じています。

忘れてはならないのは、助けてくれる人、励ましてくれる人がいるから生きていけるということです。一人では決して生きていけない、人間とは、支え合って生きていくものなのです。

私は先日、学校で、震災を振り返る授業を受けました。その中で、「幸せがあることは」という詩を読みました。その詩は名取市立第二中学校の佐藤由菜さんが書いたものです。彼女の詩は、震災が教えてくれたものそのものでした。中でも特に、「今を大切に未来を信じて毎日を生きていく」という復興への前向きな気持ちが綴られたこの一節に共感を抱きました。幸せは生きているからこそ感じる事ができると思えます。だから、一日一日を無駄にせず、今を大切に、命がある事、自分を支えてくれる沢山の人の感謝を忘れず生きていくべきだと思えました。

私たちは、千年に一度といわれる大震災に見舞われた、歴史の証人です。そのような私たちには、震災を通して改めて感じた、家族や学校、自然、命、故郷への思いを発信していく使命があると考えます。私たちの思いを言葉の力を使い形にしていく事が未来を拓き、新たな宮城を創っていく事に繋がるのではないのでしょうか。そしてそのことが何より、これまで支え励まして下さった多くの方々への恩返しになると私は思っています。

忘れてはいけな記憶

丸森町立丸森中学校

二年 佐藤 史佳

二〇一一年三月十一日午後二時四十六分、その時は小学校の校庭で鬼ごっこをしていました。走って暑くなったので、ジャンパーをぬいで指揮台に置き走り出しました。すると地面がグラグラと揺れ始めました。何が起こったのかわからず地面に座りこんでいると、職員室から先生達が出てきて、外にいた人は校庭の真ん中に集められました。私は、先生達が話しているのを聞いてやると、地震だということに気付きました。今まで経験したことのない揺れだったので、最初は何なのか考えることができませんでした。

しばらくすると、校舎の中にいた六年生が避難してきました。泣いている人もいて、先生が話しかけていました。外よりも中の方が揺れて恐かったのだと思います。ほとんどの人はまだ帰ってなくて外で遊んでいましたが、先生達は帰った人の確認などをしていました。そのうちに雪が降り始め、私達は近くのビニールハウスで、親が迎えに来るのを待ちました。ハウスの中は少し温かくて、あまり揺れませんでした。それに友達がみんないたので安心できました。そして祖父が迎えに来ました。安心したけれど、皆と離れるのが少し不安でした。家へ帰る道はいつもと変わらなくて、本当に地震があったのか不思議な気分でした。祖父の家もほとんど被害はありませんでした。停電していましたが、家はわき水なので水に困ること

はありませんでした。祖父の家は農家なので野菜やお米など食料もありました。ガスも使えなし、ボイラーはまきなのでお風呂にも入れました。夜はろうそくをつけ、炭ごたつでラジオを聞きました。ほとんど不自由なこともなく過ごしていました。

しかし、大変だったのは地震の後でした。電気が復旧し、私は何が起きていたのか初めて理解しました。何度もテレビに映し出される津波の映像。私は気仙沼にいとこが住んでいます。なぜ家族が心配していたのか知りました。いとこの家族は無事でしたが、父や祖父は毛布などを持って気仙沼へ届けに行きました。

そして私の家にとって一番大きな被害、それは、原発事故による放射能でした。祖父は牛を飼っていました。いつも家のわらを食べさせていました。ところが、放射能の影響で家のわらを食べさせることができなくなりました。そして買ったえさを食べさせることになりました。家の周りには草がいくらでもあるのに、わざわざ買って食べさせなければならなかった祖父は、とても悔しかったと思います。今ではもう、牛は飼っていません。

農業も、深刻なダメージを受けました。家では、干し柿を作っていました。毎年たくさん柿がなるので、それを干し柿にして売っていたのです。でも、放射能のせいで出荷できなくなりました。それだけではありません。裏山でとれたたけのこも、出荷できなくなりました。毎年楽しみにしていた山菜も、とらなくなりました。しいたけ栽培も、やめました。あまり放射能の影響がなかった、米や他の野菜も風評被害を受けて、あまり売れなく

なりました。今まで農業が生き甲斐だった祖父は、あまり元気がなくなりました。今も完全に風評被害がなくなったわけではありません。これから先も、不安が残ります。

生活の中でも変わったことがあります。家では、暖房を家の山のまきでまかなくなりました。しかし、焼却灰から高濃度の放射能が検出されたため、まきが使えなくなり石油ストーブを使うようになりました。今では少しづつ、家のまきを使えるようになってきましたが、灰は残っています。小学校の校庭には、放射線量を計る機械が置かれました。放射線量ののった回覧板が回されることは、今ではあたりまえになっています。放射能を気にすることなく自由に遊べる人がうらやましくて自由に遊べないときはとても悔しかったです。

地震が起きた直後は、こんなにたくさんの方が亡くなったり避難することになるとは思ってもみませんでした。それに比べれば、私は家があっても家族が無事で、幸せな方なんだと思います。それでも、原発事故で今までのように生活できなくなりました。事故がなかったら、もつと幸せに暮らせていたのかもしれないと思うこともあります。

震災から五年近くが過ぎ、だんだん関心を持つ人が少なくなっている気がします。しかし、まだ完全に復興してはいません。津波の被害を受けた場所が元通りになるには、まだ何年もかかるでしょう。放射能がなくなるのは、いつなのかわかりません。

まだまだ、つらい思いをしている人がいることを、忘れないで欲しいです。そして、この震災のことを絶対に忘れずに、ずっと伝え続けていきたいと私は思います。

あの日から始まったこと

塩竈市立第一中学校

三年 太田 峻平

あの日、大きな地震が起きて、想像もしなかった大津波がきました。津波はたくさんものを流していききました。当たり前だったはずの常識、来るはずのいつもの毎日、大切にしていたもの、大好きなああの景色を奪い去り、代わりにへドロまみれの街、考えたこともない日常、そして私の心に深い傷を残していききました。

三月十一日、私は小学校で地震に遭い、体育館へ避難しました。余震で体育館のガラスがゆれ、天井の照明を覆う金網はこわれて落ちそうになっていました。とても寒くて怖かったことを覚えています。体育館で一夜を過ごし、翌朝、父が作業服姿で迎えに来てくれました。学校から家に帰ると変わり果てた自分の家がありました。私の家は味噌、しょう油を売っていますが、店の商品やレジ、テープルやイスはひっくり返り家中がへドロまみれでひどい悪臭が漂っていました。今にも落ちそうな工場の煙突、ひびが入った壁、外に停めていた車四台が流され、工場の中はタンクが倒れて車が流入していました。いつも家の二階から見た景色は一変し、辺り一面へドロでがれきの山がありました。家は一メートル三十センチの津波が入ったらしく、浸水した跡が残っていたので確認できました。後から分かったことですが、家の近くの本塩釜駅では四メートル九十センチもの津波を記録したそうです。屋根の瓦はくずれ、本棚

の本もみんな落ちてしまいました。そして大切にしていたペットも流されました。水道、電気は止まり、何もすることが出来ませんでした。

一か月程経って、ボランティアの人達が来て水洗いやごみ、がれきの撤去を手伝ってくれました。「ボランティアの人達が来てくれなかったら復旧作業はもつとかかったかもしれない」と父は言っていました。のべ九十人くらいの人達に手伝ってもらいました。復旧作業の合間にラジオを聞いてみると、ニュースの内容に耳を疑いました。それは震災の死者が一万五五〇〇人、行方不明者は五三〇〇人というニュースでした。その時の衝撃は今でも覚えています。

ニュースを聞いてふと考えました。私はなぜあの日、生き残ることができたのかと。思い出せば避難していた時、体育館で先生方が必死に作業して、私達に食事の用意をしてくれました。その後、連日近所の人達から食料、水を分けてもらいました。家や家業の復旧のためにボランティアの人達に助けられました。私はそれらの支援によって生き残ることができた。いや、生かしてもらったのです。

それからは考えが変わりました。当たり前のこととを当たり前に思わない、いつも沢山の人に、家族に助けってもらっている、だから感謝の心をいつももつことが大切だと分かりました。学校に行き、勉強、部活ができて、大好きな習い事ができる、友達と笑って過ごせるのは一生懸命家族や自分にかかわる人達が育てて、守ってくれているからだと気付くことができました。

この生かしてもらった命は大切にしていかなければならないと思います。私達にできる事は震災

のことを後世に伝えていき、二度とこの震災のような多くの犠牲者を出さないようにすること、そして今私達が生きている意味を理解し、人生を歩んでいくことが使命だと思います。

あの日から五年、店は営業を再開し、私は受験勉強の最中です。残り少ない学校生活を友達と楽しく過ごしています。そして今、私は学校に行く前と寝る前に神棚と仏壇に手を合わせています。神様と御先祖様に今日一日守って頂いたことに感謝を込めて拜んでいます。

いつかこの命を助けてくれた人達に、この命で恩返しをしたいです。その日までに立派な社会人になれるように頑張っていきたいと思います。

今日も私の通う塩竈一中からは、船の汽笛が聞こえ、美しい水平線が見えます。以前はあって当たり前のような景色でしたが、今は違います。ここまで復旧するのに、どれだけの人の苦勞があったのかを考えると、すべての物が特別に思えます。当たり前でいられることのありがたみ……。それを今日も実感して暮らしていきたいと思います。

「あの日を越えて」

塩竈市立第三中学校

二年 鈴木 遥

震災から五年目をむかえた今年、私は、中学校二年生になりました。震災当時、私は小学校三年生でしたが、今でもあの日の光景を鮮明に思い出すことができます。あのころ私は、たぶん「津波」という言葉を知らなかったと思います。あの三月十一日に地震、そして津波のおそろしさを私は、身をもって体験したのです。あの日、私達三年一組は、校舎の三階にあるパソコン室で総合の学習をしていました。午後二時四十六分、小さな揺れが伝わってきて、パソコン室の窓、扉はまるで外から誰かが強くたたいているかのようにバンバンと音を立てました。私達はすぐ机の下にもぐりました。先生があわてて電気とストーブを消すと、夕方のように教室が暗くなりました。そして激しい揺れが私達を襲いました。私達の座っていた回転いすはあちこちに動き、向かい側に座っていた友達が泣いているのが見えました。私は恐怖でいっばいになり、揺れがとて長く感じられました。早く止まれ、早く止まってくださいと心の中で必死に祈りました。揺れがおさまると、私達は一目散に階段を駆け降り、校庭に逃げました。そこには、泣いている他の学年の子や避難してきた人、子供をむかえに来た親がいました。私達は雪の降る校庭で待った後、体育館に入り、親がむかえに来た生徒から、家に帰ったりしていました。私はむかえがまだ来ていない子達と一緒に

ステージの上で待ちました。最初はみんな気をまぎらわせようと、しりとりや、ものまねをしていましたが、一人、また一人とむかえが来て、夜はどうとう数人しかステージに残っていませんでした。不安で不安でしかたありませんでしたが、九時ごろになって、やっと紙コップ半分ぐらいのごはんと、一枚か二枚のビスケットをもらいました。その時は本当にうれしくて、少しだけ、不安がやわらぎました。そのおかげで夜は少しだけ寝ることができました。しかし、避難所となっていた体育館はトイレも汚れ、余震のたびに、避難してきた人達が不安げに声を上げました。それからとても長かった夜が明け、朝になり、母がむかえに来て、私を抱きしめました。その時、やっと心から安心しました。それから学校を出て家に帰る道に出ると、道路に池ができていました。そこで初めて私は津波がここまで来たのだということを理解しました。そして、ラジオで何万人もの人が海にひきずりこまれ、亡くなったのを知ったことを地震から何日かたってやっと知ったのでした。そして何日かしてやっと映ったテレビには津波が町のみこんでいく映像や、家や家族を失った人が映し出され、私はその時、何ともいえない無力感を感じました。

あれから五年目をむかえた今年、私は中学校二年生になり、生徒会に入りました。そして今年の夏、私達はアルカス塩竈に二日間参加しました。その二日目は防災についての話し合いで、テーマが「災害時、中学生にできること」でした。グループごとに意見を出し、一枚の模造紙にまとめて発表しました。そこにはたくさんの方が考えたつかなかったようなアイデアがあり、私は、こ

んなにも私達にできることがあったんだと思い、正直驚きました。その中でも、私はお年寄の方や小さい子と一緒に避難してあげたり、元気づけるために話し相手や遊び相手になってあげたりという案がとて面白いと思いました。遊んだり、人と話したりしている時、人は一時的に恐怖や不安がやわらぐと思います。私達が自分からそういう行動を積極的に行うことで、一人でも元気になればいいなと感じました。他にも避難所設営や物資配りの手伝いなど、中学生の私にもできそうなことがたくさんありました。

震災から五年目をむかえた今、昔は何もかも助けてもらいましたが、今度、このような災害が起きた際には、私達がみなさんを助けられるようにできることから頑張りたいです。あの日の恩返しをできるように。

「知ってほしい」

塩竈市立玉川中学校

三年 天野 夢葉

「忘れないというより、改めて知ろうよ。」今年の三月十一日、ネット新聞で見つけたこの言葉が、私の心を揺さぶりました。

東日本大震災から四度目の三月十一日、みなさんはどのように過ごしましたか。そういえば、と思い出した人、忘れたくても忘れられない人、まだ目を逸らしたい人。いろいろな思いをかかえつつ、それでも日本全国ほとんどの人が、震災について、改めて考えたことでしょう。

私ももちろん、その一人です。テレビとネットで震災関連のニュースを追いながら、自分自身のことでも思い返しました。

震災当時の私は小学四年生。幸い、家族や親戚、家も無事だったため、怖い気持ちはあったものの、比較的穏やかに暮らせた気がします。外側がどんなに嵐のようでも、家庭が大丈夫なら、人は安心して暮らせるのかもしれない。しかし、裏を返せば、家族や家を失った人は、一番の安心を奪われた、ということですね。

震災後はたくさんの方の支援を受けました。中でも印象的なものとして、一つ目が、私が参加している市民ミュージカルで受けた支援です。被災した地域に元気をとりもどすために活動しているミュージカルのことを知った、群馬県相生中学校の皆さんが、街頭募金の一部を、寄付して下さったのです。私はメンバーの代表としてお礼の手紙を書

き、相生中学校の生徒会の皆さんと交流することができました。

二つ目は、滋賀県草津市の玉川中学校からの支援です。宮城県にある同じ名前の中学校が震災の被害にあっていると聞き、応援のメッセージやベルマークを学校に送ってくれました。今年は学校の代表メンバーの一人として、草津市の玉川中学校に行き、盛大な歓迎をしていただき、大きな大きなエネルギーをもらって帰ってきました。

そんな温かい支援を受ける一方で、私の心には、なにか引く掛かりがありました。私は被災地にながらも、大して被害にはあっていません。それなのに、いつまでも被害者側にいることが、後ろめたいような、自分が良くない人間になっていくような、なんだか暗い気持ちが出てくるのです。かといって、できることも思いつきません。

そんな私にヒントをくれたのが、「あらためて知ろうよ」という言葉だったのです。「忘れない」ことはもちろん大切ですが、その前に「知ってもらう」ことも、大切なことです。

私の将来の夢は、教師になることです。この先、震災を知らないで育つ子供たちの、震災について「知りたい」という気持ちにこたえることができると願う人達の、願いを叶えることにもなる。そう思うと、心が軽くなりました。

私の体験など、大したものではないかもしれませんが、当時子供だった私には、子供の気持ちが分かります。停電でゲームの充電ができなかったこと、テレビは大人のニュースばかりで気が重かったこと、友達と遊べなくて寂しかったこと、あんなに絶望的な夜に、ありえないくらいに星が綺

麗だったこと。どれもものすごくくだらなくて、だけど、くだらないことこそが子供の心を支えて、元気にすること。そのときの気持ちを忘れずに、自分なりの言葉と体で、子供たちに震災について伝えていきたい、と思うのです。

生きる知恵や教訓は、経験によって育まれます。苦しかったことも、悲しかったことも、私は私を支えるすべての経験を大切にして、伝えて行きたいのです。

やっと見つけた自分の役割を信じて、これから自信をもって、震災に向き合っていきたいです。

記憶

名取市立第二中学校

三年 安部 ふうか

一年前にも、震災について振り返り、作文を書く機会がありました。その時の私は、その作文を書くことができませんでした。それは、震災のことを思い出したくないという思いが強かったからです。ですが、中学校生活も終盤にさしかかり、

震災のことについて私自身の中で整理し、けじめをつけたいという思いが心のどこかにあつたのも確かでした。思い出したくないことではあるけれども、震災での経験は忘れてはならないことでもあります。私が書くことで、震災を記録する資料の一つとなり、後世に伝えることができればと考えています。

私は、地震発生当時、小学四年生で、学校の授業を受けていました。最初は小さな揺れだったので、机の下にいれば大丈夫だろうと思っていました。しかし、いつまで経っても揺れは収まることはありません。だんだん大きくなっていく一方でした。机の脚をしっかりとつかんで押さえているのに、机はいつまでもガタガタと揺れていました。あまりにも大きな揺れだったので、校庭に避難しました。校庭には、生徒がとても疲れた顔をしていて、泣いている人も多くいました。二つ上の姉も校庭にいました。しばらくして、母が迎えに来てくれました。学校から家に帰るまでの時間はいつもより、とても長く感じられました。この時の私は、この後に起こる出来事を知る由もなく、何気ない

会話をしながら家族と家へ帰りました。

家に着いてまず驚いたのが、リビングのピアノが壁から1mほど動いている、食器棚が倒れ、ガラスが割れている光景でした。部屋はまるで泥棒が入ったかのように荒れていて、とにかくバツグに食料を詰めて玄関を出ました。家には、祖父もいたのですが、祖父は家に残ると言いました。そして車に乗りこみ、仙台空港へ向かうことになりました。

車を発進させて、三十秒経つたくらいのことです。交差点を曲がろうとしたその時、軽トラに乗った女性の方がこういつたのです。

「津波！早く逃げて！」

その軽トラが猛スピードで走り去つたその直後、真つ黒な物体が現れました。母は必死でハンドルを切りました。前からも後ろからもその物体は容赦なく押し寄せてきました。もうだめだと私は絶望しました。しかし、母の運転のおかげで、津波をかいくぐることができました。橋を渡れば、あと少しで助かるそう安堵したのも束の間、車と橋を渡ることができなくて、車から降りて、死にもぐるいで走りまわりました。真つ黒で大きな壁のような波から逃げるために。

大好きだったきれいで青い海。一瞬で恐怖へと変わりました。空港のエスカレーターを上りきつたの同時に、一階はがれきと黒い水でいっぱいになっていました。あと、数秒遅かったら、私はここにはいなかったことでしょう。

友達、友達のお母さんやお父さん、そして、お姉さん、知り合いで亡くなってしまった人はたくさんいます。一家全員、亡くなってしまったところもありました。亡くなって、悲しいというより、

悔しいと思いました。この人たちの分まで生きなければと考えていました。ですが、この考えは正しいのだろうかと思うことがあります。きつとやり残したことがたくさんあつたはずなのに。私は、今という時をただ何となく生きています。亡くなった人はもう戻つてこない。生きたくても、生きられない。それなのに、私は亡くなってしまった人たちが生きかけた時間を浪費して生きていっているのではないか。生き延びた私は卑怯者なのかもしれない、そう思うこともあります。「亡くなった人の分まで生きる」これは、その思いから逃れるための言い訳なのではないかと考えることがあるのです。

私は、震災で様々なものを壊され、奪われました。家、物、お金、故郷、そして友達です。しかし、最もバラバラに壊されたのは、心です。あの日から、私は、何かが壊れ、崩れたように感じています。奪われたものを返してほしいです。失われた生命はもう二度と元には戻らないということに分かっています。ですが、分かっているにもかかわらず、

ただ、私には家族がいて、友達がいて、大切な仲間がいます。だからこそ、その大切な人たちのためにも、自分にできることをしていきたいと思っています。私は、将来、建築家になりたいと考えています。もし、建築家になることができたなら、地震に強い橋や家など、災害に耐えられる建築物を設計したいです。こうして自分の夢を叶えることで、少しでも震災の復興につながればと考えています。

震災のことを思い出すと立ち止まりそうになることがあります。しかし、私にもきつとできることがあります。そう信じて一歩一歩前に進んでいきたいと思えます。

「震災を経験して」

山元町立山下中学校

三年 伊藤 めぐみ

震災から五年目を迎えた今、このように普通に生活していることがどれだけ幸せなことなのか改めて感じています。

私は避難所にいた期間が長く、二〇一一年の七月末にやっと仮設住宅に入ることができました。

しかし、家の中はまだ完成しておらず、トイレのドアや風呂場の扉がありませんでした。

でも、その時の私は避難所ではない、自分の家ができたことがとても嬉しく、気にも留めませんでした。

現在、津波の被害にあった自宅を建て直して、三年前に完成した新しい家に住んでいます。避難所や仮設住宅で過ごしていたことを忘れた日はありません。

避難所に着いて数日も経たないうちに、連絡がとれない祖母と伯母を探すために、父と母は毎日のようにいろいろどころへ出かけて行きました。避難所や知り合いに連絡を試してみましたが、二人は見つかりませんでした。三月に祖母が、四月に伯母が見つかったと話されました。祖母と伯母は、避難する途中で津波に巻き込まれ、すでに亡くなっていました。

話を聞いて、「やっぱりだめだったんだ。」という気持ちと、「信じたくない。」という気持ちが入り交じって、その時、私は何も話すことができませんでした。

火葬は、県外で行われました。

宮城県内は、どこも火葬すらできず、亡くなった方のほとんどが土葬されました。祖母と伯母が火葬される前に、せめて顔を見たいと思いましたが、母に止められました。

「お願い。二人の顔、見ないで。」

母は今にも泣きそうな表情で私に言いました。「どうして。」

と聞き返すことができませんでした。

震災が起こってから、母のあんな顔を見たのは初めてでした。後から聞いた話では、二人は遺体安置所で見つかったそうです。体だけでなく、顔に損傷があったそうで、姉と私は最後まで祖母と伯母の顔を見ることはありませんでした。あの言葉は、母が姉と私がショックを受けないように言ったのだと理解しました。

火葬が終わった後、二人の遺骨を見てぼんやりとした気分になりました。ほんの数ヶ月前まで一緒に笑ったり話していた二人はいない。頭では分かっているはずなのに、涙が出ない。言葉が出てこない。

お葬式が終わった後も、しばらくの間はただただ呆然としていました。

しばらく経ってから、祖母と伯母が住んでいた家に行ってみました。

そこには何もありませんでした。

あつたものといえば、コンクリートがむき出しの家の土台。かつて人が住んでいたとは、思えないほど生い茂った雑草だけでした。しかし、その中に生前祖母と伯母が育てていたヒガンバナとスイセンが咲いていたのです。何もない所で、祖母と伯母が生きていた証はしっかりと残っていました。

た。今でも、祖母と伯母のことを思い出すと、とても辛い時もあります。でも、わずかに残っている写真の中にいる二人は、まるで私を励ますかのように笑っています。

「絶対に忘れないからね。」

と、私は心の中で二人と約束しました。

二人のことも、震災があったことも、どんな体験をして、そんな思いをしたのかも。

震災から五年が経ちましたが、震災で被災した人たちがどのようなことを体験してきたのか分からない人は、たくさんいると思います。だから、私は多くの人に震災のことを話し、この体験を知ってもらおうと努力しています。

それと同時に、同じ体験をした方々から話を聞くことで、少しでも気持ちが楽になればいいと思います。震災を経験したことは、とても苦しく、辛いこともありましたが、それがなければ今のような考えに至ることもなかったと思います。

今は、震災から学んだことや感じたこと、経験したことを生かすことができる仕事に就き、私自身も震災のことを忘れないという約束を守るため、そして、震災のことをたくさんの人々、そして、後世に伝えていきたいです。